La Informilo de Nagoja Esperanto-Centro

センター通信 第300号　2021年5月6日発行

発行：名古屋エスペラントセンター Nagoja Esperanto-Centro
461-0004 名古屋市東区葵一丁目26-10ユニーブル新栄301号
公式サイト　http://nagoya-esperanto.a.la9.jp/
Facebookページ　https://www.facebook.com/nagoja.esperanto
郵便振替口座 00840-8-40765 「名古屋エスペラントセンター」

◀◀ 目次 ▶▶

センター通信200号の歩み（SOJO） 3
センター通信300号によせて（山口眞一） 5
遺す、広げる（山田義） 6
「パンライターP45」の頃（森田明） 8
2020年度総会報告 9
　総記・概要・欠席者からの意見 9
　決算書・予算書・貸借対照表 10
　教育 12
　企画 13
　インターネット関係 14
　蔵書 15
　機関誌 15
　読書会 17
2021年度センター委員長として（山口眞一） 18
委員会職務分掌 18
委員の自己紹介 19
VIVI EN HARMONIO KUN LA NATURO （Márkus Gábor） 23
NUMATA Ehan kaj JBLE（Yamamoto Osamu） 24
斎藤秀一顕正活動（別府良孝） 26
ザメンホフ祭報告（山口眞一） 27
活動日誌 28
編集後記 28

センター通信300号記念事業

1　創刊号以来の全バックナンバーをPDFファイル化し、公開します。
2　事務用ファイルに綴じられていた全バックナンバーを簡易製本します。

メール配信会員募集

現在11名の方々には、センター通信を郵送ではなくPDF版でお送りしています。山本修さんが「コスト削減と省資源」とおっしゃっています（9頁）。紙印刷をやめるわけにはいきませんが、メール配信会員が増えればありがたいことです。

センター通信200号（1997.11.18）より再掲

センター通信200号の歩み

センターの前身である「エスペラントの部屋」が発足したのは1973年の2月です。そして翌年、1974年の3月の総会で名称の変更を決定し、正式名称が NAGOJA ESPERANTO-CENTRO となりました。また、月1回の委員会が定例化され、5月26日（日）の第3回センター委員会後、それまで不定期に出されていた機関誌に加え、「センター通信」を維持員への情報提供紙として定期的(月1回)に出すことになったのです。

そして、第1号が1974年の5月31日に出されてから23年目(1997年11月)にして200号を迎えることになりました。そこで、200号を記念してこれまでのセンター通信の変遷をみたいと思います。形式的には大きく分けて、①ハガキ1枚でガリ版刷りの時代、②和文タイプの時代、③ワープロの時代、そして④今年の8月の198号からの電子メールを利用する時代、と4タイプに分けることができます。そこで、以下に、そのタイプ別にその時代の動きなどを紹介したいと思います。

(1)ハガキの時代(74.5~79.10)

表紙に創刊号のセンター通信を掲載しましたが、担当者は林和治(ペンネーム杜実紀)さんです。林さんは当時大学生で、エスペラントの部屋の設立の呼びかけ人の一人でした。ガリ切りがうまく、呼びかけのビラや機関誌の作成などを行っていました。74年の5月の第1号から75年3月に卒業するまで(第10号まで)の1年間担当していました。

その後、ハガキの時代は79年の暮れの61号まで続くのですが、このガリ切り、謄写版印刷、発送の仕事のほとんどを学生が行いました。

林さんの後を引き継いだのが三宅輝総(ペンネーム玉岡次郎)さんです。77年に卒業するまでの2年間担当していました(第11号〜)。76年の8月に名古屋(瀬戸)で第63回日本エスペラント大会が開催された時期に当たります。

76年の12月から、三宅さんが忙しくなってきたこともあり、当時大学2年生の藤田欣弘さんが手伝いを始めました。そして79年3月に卒業するまで、第29号から47号まで担当していました。その後、1年半、やはり学生の村田朝子さんから安藤裕治(ペンネーム安藤悠志)さんへと引き継がれ、80年10月の第61号までハガキの時代が続いたのでした。

(2)和文タイプの時代(80.12~84.10)

80年11月、当時センターの委員長であった森田明さんが和文タイプを15万円で購入し、センターに寄付していただきました。それを機会に、今までのガリ切りから和文タイプを使ってのセンター通信の作成が始まり、用紙もハガキからB4判のわら

半紙になり、封書で送るようになりました。この和文タイプの時代は80年12月の第62号から84年10月の第100号まで4年間続きました。

和文タイプになった時のセンター通信の担当は安藤裕治さんです。81年10月の第70号までの1年弱作成を行っていただきました(B4判1枚)。この間の変化はめざましく、最初はFAX原紙を使用し、謄写版や輪転機で印刷をしましたが、81年の2月に乾式電子複写機を16万円で購入し、その後はいわゆるコピー機で印刷を行いました。

この和文タイプは見ためはよいのですが、非常に大変な作業です。81年度の途中から広報担当の安藤さんの代りにセンターの委員が順番に発行業務を行うことになり、柘植、伊藤(俊)、伊藤(浩)、湯浅、鈴木(善)と毎号担当が代りました。

センター通信の担当が毎回代わることは好ましいことではなく、82年の3月にコピー機(RICIPY[原文ママ])を新たに購入したこともあり、82年度の1年間(82.4~83.5:77号~89号)は伊藤俊(T)さんが広報担当になり、両面刷りで10数ページと内容も良いセンター通信を発行しました。この年はセンター出版会から「テンポ」を発行した年でもあり、また、エスペラントの部屋の時代から毎年開催してきた合宿が最後となった年でもあります。(「第10回センター合宿」:Bowling夫妻参加、くらが池ロッジにて)

83年度と84年度の途中まで(83.6~84. 10:90号~100号)は伊藤浩治(1.K)さんが広報担当として編集を行いました。この時代は後藤正治さんが時々パソコンで編集を手伝っていました。

(3)ワープロの時代(84.10~97.5)

84年10月から始まったワープロの時代は現在まで(97.11現在)続いているのですが、作業面から担当者本人がタイプを打たねばならない時代として97年の5月までをワープロ時代としたいと思います。

センター委員の後藤正治さんが当時としてはめずらしいパソコンを購入し、ワープロを始めていたこともあり、100号を区切りとして、101号からセンター通信の担当となりました。

後藤(GOTO)さんは84年10月の第101号から87年3月の第121号までの2年半を広報担当として編集を行ったわけですが、86年の第71回世界エスペラント大会(北京)にも参加した際、中国にプリントゴッコを持参し、センター通信の号外(絵葉書版)を発行しています。87年4月から89年3月までは柘植巳知彦(柘)さんが広報担当としてセンター通信(第122号~第138号)の発行を行いました。

89年度から91年度の3年間は広報担当を決めてもセンター通信の発行がスムーズにいかない年となりました。センター通信の編集作業が大変であったからに他なりません。ワープロが普及していた時代でもあり、センター委員の多くが自分のワープロを持つようになっていました。そのため、この3年間は各委員が輪番でセンター通信

の編集を行いました。伊藤(俊)、猪飼吉計(イカイ)、山口真一、柘植の4人が毎回それぞれの個性を出して編集を行いました。(第139号~第155号)

92年の4月、パソコンを購入した鈴木善彦(SOJO)がセンター通信の担当となり現在に至っています。

第156号に始まり、97年9月までの5年半で第199号まで発行したことになります。

(4)パソコン通信の時代(97.8~)

ワープロの時代の延長線上にはあるのですが、97年8月の第198号から紙面が多少変化してきました。それは、鈴木(SOJO)がパソコンを新たに購入し、パソコン通信が出来るようになったからです。そのため、原稿が電子メールで送られるようになり、担当者が自分で打ち直さなくてもよくなってきました。すなわち、担当者は打ち間違いなどを気にすることもなく、編集に専念できる時代となったのです。現在、センター委員7名中、5名がパソコン通信ができます。まだまだ、担当者がタイピングしなくてはいけない部分は多いのですが、これからの編集形態が大きく変ってくることは間違いありません。これが時代の流れでしょう。

(SOJO)

「センター通信」300号によせて

鈴木さんがお書きになっているように、名古屋エスペラントセンターの前身は「エスペラントの部屋」といい、1973年に発足。この年に機関誌「エスペラントのへや」が5回発行されました。翌74年に「名古屋エスペラントセンター」と改称してからは、機関誌も「VERDA　RIVERO」と改称され、1977年に13号まで発行されていました。これに対して、初期の「センター通信」は、事務通信的な性格で、はがきサイズで謄写版印刷されていました。VERDA RIVERO の機関誌としての性格は、その後のセンター通信に引き継がれることによって廃刊になったと推測します。

鈴木さんは、上記で「パソコン通信の時代」として締めくくっていますが、現在はパソコンも機能が格段に進化し、パソコン通信からインターネットの時代となっています。紙面のデザインを多様化し、写真や絵を貼り込むのが容易になり、そして手軽にPDFファイルが作成できるようになりました。そのため、ネット上で印刷物と同じ体裁で読むことができるようになりました。現在のセンター通信のスタイルを作ったのは、伊藤俊彦さん（2001年4月から5年間を担当）の後を受けた山田義さんで、247号（2006年9月）から280号（2016年3月）までを編集されました。

（山口眞一）

遺す、広げる

山田　義

私が「センター通信」の発行を担当し始めたのは 247号 (2006年の6月) からである。64歳であった。名古屋エスペラントセンターの委員会の全体で原稿を集めたり書いて編集してくれれば、印刷とか製本とか手作業が好きな私がやりましょうということで承知した。しばらくして、「センター通信」に加えてエスペラント名 “La Informilo de NEC” （262号から）が決まった。277号からタイトルのデザインをカラー仕立てで新しくした。282号からは猪飼吉計さんに担当を交代した。その後も好きな印刷と製本や郵送は引き受けている。

編集方針なんてのはこれといってなかったが、当たり前ではあるが写真、図表なども含めてその執筆者、転載だったりすればその出所、そして人の名前ははっきりと書くことにした。私は、原稿を催促して集めることが苦手であった。そんなときに埋め草として、受け取ったメールの端をコピーして載せたら後藤正治さんからこっぴどく叱られた。また、センター関係者以外の記事をもらって載せたところ猪飼吉計さんからは原稿が集まらないことを同情されながらも大いに笑われた。校正は山本修さんに頼んで丁寧な校正をしてもらって年に数回の発行を進めた。ある号では、もっと写真の印刷仕上がりを向上させよとの声が永瀬義勝さんからもらった。（この300号も私が印刷することになっているので、今までの古いプリンターをやめて新しくした。）

第一面は写真と目次を置き、センターの特色としてエスペラントの書籍に関する記事を毎号どこかに載せるよう努めた。挿入する画像としてしばしば本を撮影した。書籍を撮影するだけと言っても照明や背景を工夫するにはセンターの部屋では道具が不足し、やはり自宅に持ち込んだりして、デジタルカメラを何枚も撮って工夫した。

文章や画像を寄稿する人がいる、数ページの版を作るのであるが、原稿を書く人がコンピュータでテキストや画像として入力したものを提供してくれるのがありがたかった。手書き原稿をキーボードで入力したこともある。そして、原稿をただ順番に並べて詰めていくだけでは単調な発行物になってしまう。版面のレイアウトには気を使った。エスペラントと日本語の混在、バランスも考え、その扱いにも工夫が要った。B5という大きさにどう文面や画像を配分するのか、どの雑誌の編集者も苦労するところであろう。そして、コンピュータで作った版を紙に複製していく必要がある。多くの読者にその印刷物を読んでもらいたい。その読者というのは会員に限らない、エスペラントに関心を持って学習し始めた人、長年エスペラント運動に関わっている人、そして次の代の人が読者であり、発行物の記録を資料にして研究評価を膨らませていく人があるはずだ。作った記事を伝える、届けるという仕事も大切

なことである。現代では、エスペラント界のどこかに、こういった機関誌を運動記録も資料として集め管理してくれる機関もある。欠如なく届けることで資料として価値も上がるであろう。

ここで、発行作業が終わるが、現代では更に、遺す、広げるためには紙という媒体の資料は電子媒体に載せておく必要がある。そうすれば活用方法は途方もなく広がる。エスペラントに関して何かをインターネットで検索するとき、「センター通信」が出所としてたどり着くことがしばしばある。紙媒体の発行部数はほんの僅かだがその情報を必要としている人たちがエスペラントだからこそ世界中にいるし、次世代への遺贈物になる。

印刷から製本と発送についてここに書いておく。プリンター、裁断機、ベニヤ板、万力やボンドがあればできる方法をである。

「センター通信」は B5の大きさである。プリンターの両面印刷はA4でのみが可能だからA4用紙を使って印刷しあとでB5版に切り落とす。

両面印刷ができたら糊付けする。版のマージンは長辺左寄せ13mmをプリンターに設定して用紙をセットする。横書き本の場合、本を開いたとき、右ページが奇数でありその裏面が偶数となっている。プリンターでは両面印刷を指定すれば丁合いは間違いなく仕上がる。印刷ができたら重ねてベニヤ板とクランクで締め付け綴る側の小口を板から5mmほど板からはみ出して締め付け、ワイヤーブラシで叩いてボンドがよく絡まるようにする。紙工ボンドにはヤマト糊のようなデンプン糊を混ぜておくと完成後本立に置いたときなど他の紙製品などに糊り移りしない。指先でも硬いブラシでもいいが擦り込みむようにして糊を塗る。乾いたら裁断機で B5に裁断する。その後１冊ずつ切り離すのだがカッターナイフはだめ。よく切れすぎて紙面を切ってしまう。糊面だけを切り離して１冊にしたいので、刃厚が厚くてノコギリ状になっておれば作業は楽だ。「ノコ刃ナイフ」を検索して1本準備するといいだろう。

郵送には紙の封筒よりポリエチレンの11号規格袋を使う。宛名票に郵便局の規定の大きさで「料金別納」を同時に印刷すれば宛名タックや切手を貼る手間がない。竹の定規などをあてて、しっかり温めた半田ゴテで閉じて発送する。

「パンライターP45」の頃

森田　明

1970年代の「センター通信」の体裁はハガキに謄写印刷。蝋をひいた薄い紙＝原紙をヤスリ板にのせ、その上から鉄筆でガリガリと文字を刻み込んでいくところから「ガリ版」とも呼ばれ一世紀近くにわたって親しまれてきた簡便印刷法だが、やがて台頭するワープロに駆逐される運命となる。しかしそのワープロがいまだ数十万円の高値商品にとどまっていた1980年代前半、大いに活躍したのが和文タイプライターだった。「通信」の紙面はその間にハガキ大からB5判となり、ゼロックスコピーが使われだしたが、まだ手書きの状態。そこで何よりも読みやすく、ついでに情報量の拡大を、と念じた小生が勤務先の生協を通して日本タイプライター社製の「パンライターP45」を購入し、NECに寄贈した次第。うたい文句に「機能を限定しつつ、小型化を図った画期的なもの」とあった。たしかに両手で抱えて持ち運ぶことは可能だったが、軽快な欧文タイプライターとは大違い。なにしろ2000個を超える小さな鉛活字がぎっしり並ぶ収納庫から、右手でファインダーを操作しながら目的の活字を探し出し、つぎに左手でレバーを押してその活字をローラーに勢いよく打ち付けなければならない。打ち間違えると修正はきわめて困難、という遅々とした苦しい作業を強いるシロモノ。当時の編集後記には「目はかすみ、腕はしびれ……」という担当者たちの悲鳴が残っている。

1984年から85年にかけて「グリコ・森永事件」が世間を騒がせた。その際「かい人21面相」を名乗る犯人グループが食品企業などに送りつけた脅迫状がすべて「パンライターP45」で印字されていたことが判明した。警察は出荷済みの製品をしらみつぶしに追跡調査し始めた。小生宅にも名古屋東署の刑事が訪ねてきた。販売経路が明確だったからすぐわかったのだろう。実物を確認する必要がある、というので東新ビル内のNEC事務所に案内した。刑事はパンライターの背面に貼ってある製品番号をメモすると、丁重に礼を述べて帰っていった。後から知ったことだが、このころまでに警察は犯人使用の機種が1982年8月31日付で日本タイプライター社茨城工場から出荷された20台のうちの一台、というところまで絞り込んでいた。（結局この一台の行方が解明できず、犯人グループにたどり着けなかった）。

パソコンで作った原稿をプリンターにかけ版下にするのが一般化したのは、早くても1990年代半ばからではなかろうか。パソコン技術は目覚ましい発展を遂げていたが、気安く手を出す価格にはまだ遠かった。後藤正治さんが自分で部品を調達し組み立てたプリンターで「センター通信」の版下を作成したことが懐かしい。

NECのパンライターは役目を終えていつの間にか姿を消した。いま、ヤフオクを覗くと往時のさまざまな邦文タイプライターが売りに出されているのがわかる。レトロなメカニズムを楽しむ人が結構いるのだろう。緑色の金属カバーを付けたあのパンライターP45と同じ機種は最近4000円で落札された、という。

2020年度総会報告

総記

場所　センター事務所
日時　3月27日（土）13時00分から16時
議長　今井田健二
書記　湯浅典久
維持員総数40名、現出席9名（内リモート出席2人）+委任状15名＝計24名の過半数により総会成立

概要

昨年はSkype併用で開催しましたが、今年はZoom併用となりました。

議長選出、議長による書記指名、現出席数・委任状数確認の後、①決算報告②各部の事業報告③予算審議④委員の選出⑤次年度の活動への意見交換、という次第で行われました。

次期委員には、前期委員全員（鈴木善彦、堀田裕彦、湯浅典久、今井田健二、伊藤俊彦、永瀬義勝、山口眞一）に加えて、新たに後藤みわこ、藤本日出子、小川博仁、川地善則が選出されました。合計11名となります。

ただちに第1回の委員会を開いて、互選により山口が委員長、今井田が副委員長となり、以上を再度総会にて承認をしました。（正副委員長以外の分掌は第2回の委員会で決定をします。）

総会での意見や議論については、議事録をセンター事務所に備え付けますので、ご覧いただくことができます。希望があればメール添付でお送りすることも可能です。

総会欠席者からのご意見（委任状より抜粋）

コロナ禍にもかかわらず見事な大会運営！記念出版物ともども秀逸でした。関係の方々に感謝あるのみ。（森田明さん）

機関誌を紙版から電子版に変えてはどうでしょうか。コスト削減と省資源のためです。（山本修さん）

決算書

2020.1.1-2020.12.31

収入の部

科目	前年度予算	本年度決算	増減
前年度繰越金	757,674	757,674	0
現会員（38）	541,000	312,500	-228,500
新再会員（2）	57,000	26,000	-31,000
寄付	130,000	66,218	-63,782
事業費	30,000	637,500	607,500
本の売上	70,000	92,449	22,449
その他	0	388,920	388,920
計	**1,585,674**	**2,281,261**	**695,587**

支出の部

科目	前年度予算	本年度決算	増減
家賃	448,800	448,800	0
共益費	158,400	158,400	0
保証協会	0	10,048	10,048
電気代	98,000	107,979	9,979
通信作成代	23,000	10,000	-13,000
郵送代（切手代）	35,000	38,715	3,715
蔵書製本費	22,000	0	-22,000
図書購入費	10,000	10,000	0
サーバー使用料	25,920	12,960	-12,960
事業費（*)		782,000	782,000
その他	9,000	7,957	-1,043
（小計）	830,120	1,586,859	756,739
次年度繰越金	755,554	694,402	-61,152
計	**1,585,674**	**2,281,261**	**695,587**

(*)日本エスペラント大会記念本出版

予算書

2021.1.1-2021.12.31

収入の部

科目	前年度予算	本年度予算	増減
前年度繰越金	757,674	694,402	-63,272
現会員（40）	541,000	468,000	-73,000
新再会員（6）	57,000	70,000	13,000
寄付	130,000	100,000	-30,000
事業費	30,000	30,000	0
本の売上	70,000	100,000	30,000
その他	0	0	0
計	**1,585,674**	**1,462,402**	**-123,272**

支出の部

科目	前年度予算	本年度予算	増減
家賃	448,800	448,800	0
共益費	158,400	158,400	0
保証協会	0	7,596	7,596
電気代	98,000	108,000	10,000
通信作成代	23,000	23,000	0
郵送代（切手代）	35,000	35,000	0
蔵書製本費	22,000	22,000	0
図書購入費	10,000	10,000	0
サーバー使用料	25,920	25,920	0
その他	9,000	10,000	1,000
（小計）	830,120	848,716	18,596
次年度繰越金	755,554	613,686	-141,868
計	**1,585,674**	**1,462,402**	**-123,272**

貸借対照表（2020.12.31）			
資産の部		負債資本の部	
郵便振替口座	186,724	借入金	369,699
ゆうちょ銀行	467,567	前受金	634,000
三菱UFJ銀行	4,835		
現金	35,276		
未収金	44,500	通算損失	-264,797
合計	**738,902**	**合計**	**738,902**

（備考）借入金は出版会より。前受金は会費の前納分

（鈴木善彦）

《教育》

中級講習会（旧名：初級講習会）

毎月　1回ないし2回　17:30~19:30（全13回実施）
参加人数：5名
講師：小川一夫
内容：雑誌記事やネット記事のコピー。自由作文など
昨年度から「初級講習会」を「中級」と改称した

入門講座

随時開催
講師：山口眞一
教材：「ドリル式エスペラント入門」
受講料：1000円／回
第四期（現在継続中）
期日：09/29,10/15,11/05,11/18,12/04,12/18の6回、14:00~16:00
受講者：2人

初級講習会

実施なし

愛知サマーセミナー（講座「国際語エスペラント」）

2020年は開催なし

次年度の計画

◎愛知サマーセミナーには引き続き参加したい。
◎第四期入門講座終了後の講習は未定

（山口眞一）

《企画》

※ひし形記号(◆)は年間計画行事。

2020年度当初の構想

a)　姉妹都市とのスカイプ交流会(ランス、シドニー、さらに他の姉妹都市のエスペラント会と)
b) ワールド・コラボフェスタ(10月頃)
c) ザメンホフ祭(12月)
d) JEIエスペラント学力検定試験(希望者いれば)
e) 愛知サマーセミナー

a) 姉妹都市とのスカイプ交流会◆

実施せず。

b) ワールド・コラボフェスタ2020 ◆

例年秋の開催だったが、コロナ禍のためバーチャル開催に移行(2020-12-12～2021-01-11)。参加は見送りに。

c) ザメンホフ祭(12月) ◆

2020-12-20予定だったが2回の延期を重ねて、2021-03-27(土)16:30/19:30に実施(出版祝賀会、日本E大会の打ち上げを兼ねて)。会費5000円　参加13人。会場（リリーバンケット）担当：山口眞一

d) JEIエスペラント学力検定試験◆

実施せず。会員からの希望なし。積極的な呼びかけもせず。

e) 愛知サマーセミナー

2020-07-18(土)～19(日)の2日間の予定だったが、コロナ禍のため行事自体が延期に。

そのほか
(2019年度の項目との対比と思い出し)

1) ミニ講演

2020年度計画なし。実施もなし。

2) 第107回日本エスペラント大会

LKK活動の範囲。(企画担当者堀田裕彦個人は、ハイブリッド開催と会場運営の業務で、企画要素をおりこむ活動に重点をおいて取り組んだ。)

3) 第67回東海エスペラント大会

日本エスペラント大会で、地域の関係者が手一杯のため大会は開催見送り。

次年度の計画(案)

1)　姉妹都市とのリモート交流会(ランス、シドニー、さらに他の姉妹都市のエスペラント会と)
2) 愛知サマーセミナー(7月頃)
3) ワールド・コラボフェスタ(10月頃？)
4) ザメンホフ祭(12月)
5) 東海エスペラント大会(？月)

項1)は、おくれながらも、日本エスペラント大会後のお礼・報告会の集まりとするのもよいかも。また、項5)と合同集会の方法かもしれない。項2)、項3)は、新型コロナウィルス感染症の流行によっては、行事自体がオンラインになるかもしれないが、それに構えをするか考えどころ。

（堀田裕彦）

《インターネット関係》

ウェブサイト

- 2020年12月3日　[NEC案内]部屋の使用規則を更新しました。
- 2020年11月16日　[通信より]「センター通信」バックナンバーのPDF版を追加しました。（296号）
- 2020年9月28日　[講習会・学習会]入門講座を更新しました。
- 2020年9月28日　[行事案内・報告]行事案内　を更新し、ザメンホフ祭の情報を追加しました。
- 2020年9月28日　[通信より]「センター通信」バックナンバーのPDF版を追加しました。（295号）
- 2020年5月22日　[本と批評]>[読書日記]を更新し、"Zinko"を追加しました。
- 2020年5月15日　[通信より]「センター通信」バックナンバーのPDF版を追加しました。（294号）
- 2020年4月15日　[NEC案内]委員会メンバー を更新しました。
- 2020年2月22日　[本と批評]>[読書日記]を更新し、"Sortoj　frakasitaj"を追加しました。
- 2020年2月22日　[通信より]「センター通信」バックナンバーのPDF版を追加しました。（293号）
- 2020年1月23日　[トップページ]第107回日本エスペラント大会へのリンクバナーを貼りました。

上記の通り、11回の更新を行った。（昨年度の更新回数は15回。）

Facebookページ

「いいね！」166人（前年対比+17）・フォロー数171人（前年対比+20人）
2020年は11本の記事がアップされた（前年は36本）。イベント案内、イベント報告、読書会案内、講習会関連、日本大会関連など（山口5本、伊藤6本）
記事のアップ回数は大幅にダウンしたが、フォロワーは増えている。

メーリングリスト　[esperantistoj_de_tokai]

投稿総数16件（前年対比－3）
情報交換の場として活用されているが、一部の人にしか認識されていない？
配信メンバー42人（前年対比＋1）

掲示板

12件の記事。すべてセンター事務所使用予定。掲示板の目的は、使用予定の把握と管理に特化している。

マスコミ

中日新聞09-16朝刊に、「『エスペラント』本の書評集」として著者の伊藤俊彦さんの写真とともに4段の記事。その他、日本エスペラント大会に関連した記事（日韓シンポ、および斎藤秀一関連）が、中日新聞や東京新聞などに出た。

次年度運用について

○引き続き、４つの柱（ウェブ、FB、ML、掲示板）の運用をはかり、情報発信につとめる。

○ウェブサイトについては、早急にではないが、https化（通信内容の暗号化）を検討する。ただしこのためには、サーバー移転も視野にいれる。

（山口眞一）

《蔵書》

•2018年から書籍にナンバーを付けた写真撮影している。現在3,900番まで来ているが、書籍の撮影はまだ残したものがある。これを基にしたデータを入力は1,000まで進んでいる。

•2020年度は、日本大会とコロナ禍で蔵書整理は全く実施することができなかった。

•故川合隆史さんの蔵書引き取りの相談があり、４月20日に湯浅、山田義氏と守山区の川合さん宅へ行き、ダンボール４箱をセンターに搬入した。

•今年度は、雑誌類のリスト作成と書籍の写真撮影による入力作業を続行する。

•蔵書の整理と作業は、蔵書部会（前任者の山田義氏も含めた）で進めていく。

（湯浅典久）

《機関誌》

（2020年度センター通信総目次）

第295号／2月18日発行　18ページ

ザメンホフ祭の報告（山田義）／エスペラントセンター蔵書の由来と形成（1）（永瀬義勝）／Mia vojaĝo en Eŭropo en 2019 (2) (Huĝimoto Hideko)／日韓の国際行事が育んだもの（1）（2）（堀田裕彦）／Vidindaj Lokoj en kaj ĉirkaŭ Nagojo (5) (Yuasa Norihisa)／新会員自己紹介（内藤恵子・石川由佳理・今井田健二）／(libroprezentado) “Vostoj Ridas!!” (Nakayama Akiko)／活動日誌・今後の活動予定／日本エスペラント大会だより

第296号／4月14日発行　24ページ

Mia Vojaĝo en Eŭropo (3)（Huĝimoto Hideko）／2020年度総会報告／2020年度センター委員長として（山口眞一）／日韓の国際行事が育んだもの（3）（4）（堀田裕彦）／活動日誌／日本エスペラント大会だより／Vidindaj Lokoj en kaj ĉirkaŭ Nagojo (6) (Yamaguti Sin'iti)／新会員自己紹介（別府良孝）

第297号／7月8日発行　20ページ

故・川合隆史さん蔵書（山田義）／エスペラントセンター蔵書の由来と形成 (2)（永瀬義勝）／『歴史・文学・エスペラント』／Kiel mi pasigis mian 90-tagan hejmrestadon（Peng Zhengming）／Vidindaj Lokoj en kaj ĉirkaŭ Nagojo (7) (Isobe Akira)／Vidindaj Lokoj en kaj ĉirkaŭ Nagojo (8) (Marc A. Kastner)／日韓の国際行事が育んだもの（5）（堀田裕彦）／日韓の国際行事が育んだもの・こぼればなし（1）（堀田裕彦）／Esperanto kaj Budhismo（Yamaguti Sin'iti）／活動日誌／日本エスペラント大会だより／武谷三男とエスペラント／日本エスペラント協会・新理事決まる

第298号／10月5日発行　14ページ

La 107a Japana Esperanto-Kongreso（Yamaguti Sin'iti）／大会参加者の声（今泉久典、北川郁子、柴山純一、石川智恵子、田平正子、笹沼一弘、木村護郎クリストフ、田渕八州雄、藤田喜久、鈴木恵一朗、山田義、相原美紗子、片山浩子、今井田健二）／活動日誌・第4期入門講習会／名古屋ザメンホフ祭

総括

◎発行回数は昨年度と同様、総頁数76（前年より4減）。
◎毎号「日本エスペラント大会だより」を載せて参加への意欲を高めることをめざしたが、ROからの転載なので、独自記事があってもよかったか。
◎委員会全体で、記事集めについて話し合いができ、全体としてバランスのとれた編集になった。

次年度の計画

◎発行回数は今年度に準じる。
◎300号記念号の編集をすすめている。5月発行予定。バックナンバーデジタル化と製本計画。
◎書き手が委員に偏らないよう、広く執筆依頼をしていく。
◎連載として、観光案内、蔵書紹介は継続していく。

（山口眞一）

読書会 Ni legu

1　日時・会場

2020年度は、コロナ禍のため、センターでは開催できず、Zoom、Googlemeetによるオンライン開催となった。

2020年　11／24、12／22

2021年　１／26、２／23、３／23　合計５回開催。

2　参加者　６名

3　進め方等

毎回、予め指定された範囲を予習し、当日は参加者が順番に１ページほど読んだ上で内容を要約し、その後、理解できなかった箇所、時代背景、執筆者の意図などテキストの解釈をめぐって自由に討論するというやり方で進めた。

4　実施状況の報告・次回の予告

各回の内容を名古屋エスペラントセンターのFacebookで適宜報告している。

5　テキスト

読書会Ni legu は2014年６月12日発足以来、間もなく７年になろうとしている。これまでに読んだテキストは以下のとおりである。

・Hori Jasuo“Raportoj el Japanio 15” 2014．6／12 ～　６回
・Julian Modest“Mara Stelo” 2015．1／29 ～　５回
・Monato　2015．７／28 ～　７回
・Julian Modest“La viro el la pasinteco”　2016．２／24 ～　10回
・István Nemere“Krokize de mia ĝardeno” 2017．　１／27 ～ ７回
・Kalle Kniivilä “Homoj de Putin”2017．８／16 ～　26回
・Julian Modest“Dancanta kun Ŝarkoj” 2019. 12／18 ～ 現在　７回
　　合計68回

6 まとめ

2020年１月28日を最後に、新型コロナウイルスの感染拡大、日本エスペラント大会の開催準備のため、10か月中断していたが、年度後半からオンラインで開催した。月に１回ではあるが、参加者全員で一つのテキストを読み、議論する楽しみを味わうことができた。

7　総会での質疑

質問：Ni leguと同様、最近はオンラインで開催している土曜エス会のように、全国あるいは海外からの参加者を受け入れる予定はないか。

回答：輪読方式で行っている読書会なので、少人数のほうがふさわしく、今のところ、これ以上参加者を増やす予定はない。

（報告者　伊藤俊彦）

2021年度 センター委員長として

山口　眞一

第107回日本エスペラント大会を、コロナ禍という前代未聞の状況のうちに、苦闘しながら成功裡に終えることができました。センター委員の皆さん、維持員の皆さん、そして地元の実行委員の皆さんには心から感謝申し上げます。

この大会を引き受ける前から、「大会が終わって気が抜けてしまって活動がかえって停滞する」ことがないように、と意識してきました。現状はしかしながら、停滞というのではありませんが、コロナウィルス感染拡大第４波という、厳しい情勢のもとで、どうしても活動範囲を縮小せざるをえません。かてて加えて、私自身の仕事上の事情もあり、エスペラント活動にかける時間を大幅に削らざるをえなくなりました。委員長交代をお願いしましたが、それもかないませんでしたので、私としてはできるだけのことはいたしますが、十分な活動ができそうにありません。

しかし、今期新たに4名の新委員が誕生したことは大きな成果です。以下に委員の皆さんの自己紹介と、職務分掌を掲載しました。従来と異なり、職務をもたない委員が5名いますが、遠隔地居住や生活上の問題などの条件で具体的な仕事を持たないけれども意見を出していただいたり、あるいは短期の業務を担当していただいたりすることを考えています。また、昨年に引き続き、リモートワークやリモート会議を積極的に実行することになると思います。私のいたらないところを委員をはじめ、維持員の皆さんに助けていただきたく、よろしくお願い申し上げます。

2021年度 委員会職務分掌

委員長	山口
副委員長	今井田
会計	湯浅
教育	山口
機関誌	山口
広報	山口
蔵書	湯浅、今井田
情報提供	堀田
図書販売	永瀬
総務	今井田
姉妹都市	永瀬
企画	永瀬（東海大会） 鈴木（日本大会出店）
	＊その他の行事については、その度毎に担当を決める。（サマセミ、Z祭、コラボフェスタなど）
無任所	後藤、藤本、小川、伊藤、川地

委員の自己紹介

山口眞一

1959年生まれ。1977年、信州大学エスペラント研究会（Rondo Harmonia）で学習しました。学生時代は、語学の勉強よりも、いわゆる「運動」とか「理論」に熱中していました。センターへは1982年に入会、1989年に委員となりました。

現在、国際仏教エスペランチスト連盟事務局長、日本仏教エスペランチスト連盟理事長をしています。経典などの文献をエスペラント訳し、ネット上あるいは機関誌で公開しています。

Yamaguti Sin'iti

Naskita en 1959. En 1977 mi eklernis Esperanton en studenta rondo de E. (Rondo Harmonia). Kiam mi estis studento, mia intereso estis pli direktita al t.e. *movado* kaj *teorio* ol al lingva lernado. Mi aliĝis al NEC en 1982 kaj fariĝis ĝia komitatano en 1989.

Nun mi estas sekretario de Budhana Ligo Esperatista kaj ĉefdirektoro de ĝia japana branĉo. Mi tradukadas sutrojn kaj aliajn budhismajn tekstojn, publikigante ilin rete aŭ broŝure.

藤本日出子

NEC活動歴ありません。

2012年頃からエスペラント再開、海外の人たちとの交流が始まり、国内では恵那学習会に参加(Ni vivos! の翻訳とMartaの輪読中)。2019年7月26日にLahtioのUKでTEO(Teamanta Esperantista Organizo)を立ち上げ、TEOの会員。茶道と、エスペラントに支えられながらの日々です。NECのzoomでの参加、どうかよろしくお願いいたします。

Huĝimoto Hideko

Preskaŭ mi neniom agadis por NEC. En 2012 mi revenis en esperantujo. De tiam mi havis kontakton kun eksterlandanoj, enlande mi lernas en Lernorondo-Ena. En la 104-a UK, Lahtio 2019, ni, te-amantoj lanĉis la grupon, TEO (Teamanta Esperantista Organizo), tial ke, nun mi estas ano de TEO. Esperanto kaj Teo mian vivon nunan subtenas. Bonvolu konatiĝi kaj gvidu min en NEC.

後藤みわこ

このたびセンター委員になりました。春日井市在住です。童話・児童文学の創作と創作指導が現在の仕事です。エスペラント語を知ったのは高校時代ですが、身につけることができないまま、還暦を迎えようとしています。委員としてできることがあるのか…NECで学びながら見つけていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

GOTO Miwako

Mia nomo estas GOTO Miwako. Mi loĝas kaj laboras en la urbo Kasugai. Mi eksciis Esperanton antaŭ 43 jaroj. Sed mi ne lernadis ĝin dum 41 jaroj. En NEC mi lernas Esperanton kaj serĉas mian taskon.

今井田健二

ザメンホフに惹かれて5年ほど前にエスペラントを始め、昨年の日本大会では開会式の司会を務めました。大学図書館で司書をしていますので、経験を活かしてセンターの蔵書整理にも貢献したいと思っています。

昨年度は委員としてほとんど何もできず申し訳ない思いです。今年度は新たに副委員長となりました。山口委員長をサポートし、センターの活動を盛り立てていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

Imaida Kenĵi

Interesite de la ideo de Zamenhof mi eklernis Esperanton antaŭ 5 jaroj. En la lasta Japana Kongreso mi prezidis la inaŭguron. Mi laboras ĉe universitata biblioteko, do per la scio kaj sperto mi kontribuu al aranĝo de libroj en la oficejo.

Mi pardonpetas, ke lastjare mi povis fari preskaŭ nenion kiel komitatano. Ĉi-jare mi nove fariĝis vicprezidanto. Kunlaborante kun aliaj komitatanoj mi subtenu la prezidanton kaj vigligu nian agadon.

伊藤俊彦

エスペラント歴は1971年名古屋大学入学とともに始めて以来、半世紀に及びますが、引きこもって本を読んでいる怠惰なエスペランティストです。昨年は第107回日本エスペラント大会の記念品として、これまでに書いた書評等を収録した『歴史・文学・エスペラント』を刊行していただきました。センター委員には長年名前を連ねています。お役に立てませんが、読書会 Ni legu は続けたいと思います。2018年から日本エスペラント協会理事を一期務めました。八ヶ岳エスペラント館運営委員も務めています。

Ito Toshihiko

Mia esperantisteco jam daŭras duonjarcenton, de kiam mi eniris en la Universitaton de Nagoya. Multajn jarojn mi servas kiel komitatano de Nagoja Esperanto-Centro. Sed mi estas maldiligenta komitatano, retiriĝema libroamanto. Lastjare oni eldonis mian verkon “Historio Literaturo Esperanto” kiel memoraĵon de la 107-a Japana Esperanto-Kongreso. Mi volas daŭrigi la legkunsidon “Ni legu”. Mi servis kiel estrarano de Japana Esperanto-Instituto de 2018 ĝis 2020 kaj servas kiel komitatano de Esperanto-Domo de Jacugatake kelkajn jarojn .

鈴木善彦

大学を卒業した1975年以来、センターには人一倍顔を出してきたのですが、昨年1月に一人暮らしであった母（現在96歳）の世話もあり、田舎暮らしとなりました。そのため、コロナ禍もあり、この1年はほとんどセンター・名古屋に行けなくなり、今まで行ってきた会計の

SUZUKI Joŝihiko

De la jaro 1975, kiam mi eklaboris, mi ofte vizitadis la oficejon de NEC. Sed bedaŭrinde en januaro de la lasta jaro, mia solevivanta patrino malsaniĝis, tial de tiam mi devas vivi prizorgante la patrinon en provinco, mia naskiĝloko. Pro tio kaj sub koronavirusa pandemio,

仕事もままならなくなりました。しばらくは役のない委員としてできる範囲でお手伝いできればと考えています。

mi preskaŭ ne povas viziti NEC / Nagojon, nek labori kiel kasisto de NEC. Ĉi-jare mi esperas agadi por Esp-movado kiel sentaska komitatano helpante aliajn anojn.

小川博仁

私は犬山市で2004年開催の第91回日本エスペラント大会に参加するためにエスペラントを学習し出しました。専門は言語学（とりわけロマンス諸語の歴史的研究）とエスペラント学(すなはち言語としてのエスペラントの研究)です。新米のセンター委員としての抱負は、名古屋エスペラントセンターに「新風」を吹き込むことです!!

OGAWA Hirohito

Mi eklernis Esperanton por partopreni en la 91-a Japana Esperanto-Kongreso en la urbo Inuyama en 2004. Mia fako estas lingvistiko (precipe historia studo de la latinidaj lingvoj) kaj esperantologio (tio estas studo pri Esperanto kiel lingvo). Kiel nova komitatano de Nagoja Esperanto-Centro mi deziras, ke en la NEC-n venu NOVA VENTO !!

湯浅典久

私がエスペラントを始めたのは、４０年以上前になります。名古屋市の保健所に就職して数年たった頃、同じ仕事をしていた鈴木善彦さんからエスペラント会に誘われました。

現在は、年金生活者です。趣味は、歩こう会などで歩くことと、家庭菜園で季節に応じた野菜を作っています。私は組合運動と同様にエスペラント運動に関わっています。委員としては、センターの蔵書整理に力を入れていきたいと思っています。

Yuasa Norihisa

Mi komencis Esperanton antaŭ pli ol 40 jaroj. Post kiam mi dungiĝis ĉe la sanitarejo en Nagojo, S-ro Suzuki joŝihiko, kiu havis la saman laboron, invitis min al Esperanto-kunveno. Nun mi estas pensiulo. Mia ŝatokupo estas piedirado kun anoj de promenada rondo kaj farado de sezonaj legomoj en ĝardeno. Mi partoprenas Esperanto-movadon same kiel la sindikatan movadon. Kiel komitatano, mi klopodas aranĝi la bibliotekon en NEC.

堀田裕彦

大阪府枚方市在住。

エス語は1978年独学。技術分野好きの性格から、エス日英コンピュータ用語集の編集、エス語関連デジタルデータとツールの作成や活用の普及、近年はエスペラント広報に注力。日本エスペラント協会理事(2020-2021)。

HOTTA Hirohiko

Mi loĝas en la urbo Hirakata en Osaka.

Aŭtodidakte esperantistiĝinte en 1987, mi en esperantujo inĝeniereme laboris pri esperanto-japana-angla terminaro pri komputilaĵo, kaj pri daten-/ilo-kreado kaj apilikoj. En lastaj jaroj mi interesiĝas pri Esperanto-informado.

本職は産業機器・通信機器の組込みソフトウェアの開発と品質向上。

2014年10月から昨年11月の名古屋単身赴任時に名古屋エスペラントセンターに加入。委員会では企画等を担当。

Mia profesio estas evoluigo de enmuntitaj softvaroj por industriaj/telekomunikaj sistemoj, kaj la plikvalitigo. Mi laboris dum la lastaj kvin jaroj en Nagoya.

Membriĝinte en NEC, mi laboras ĉefe pri plano de eventoj kaj eventetoj rilataj al NEC.

川地善則

エスペラント歴は高校生のときからですから、もうかれこれ半世紀近くになります。ＮＥＣとの出会いは昭和５９年ごろだと記憶しています。

職業は今は京都の地で子供と農業を営んでいます。趣味は、たくさんありますが、主に登山やアマチュア無線やお茶など。でもいまは農業がいそがしくて、すべて遠ざかっています。エスペラントも。なかなか、名古屋へ行く機会がありませんが、ＮＥＣの活動に期待するとともに、もっとアジアでエスペラントが広がれば良いなと強く感じています

微力ですが、少しでもお役にたてればと思っています。

Kaŭaĉi Joŝinori

Mi eklernis Esperanton antaŭ ĉirkaŭ duona jarcento, estante en supermezlernejo. Mia unua renkontiĝo kun NEC estis ĉirkaŭ la jaro 1984, laŭ mia memoro.

Nuntempe mi laboras en kamparo de Kameoka en Kioto kun mia filo. Mia ŝatokupoj estas diversaj, ĉefe montogrimpado, amatora radio, teceremonio ktp. Pro mia okupiteco en kampara laboro mi ne disponas tempon por aliaj aferoj, inkluzive de Esperanto. Mi ne havas ŝancon por viziti Nagojon. Mi esperas tamen, ke la agadoj de NEC estu pli aktivaj, kaj ke Esperanto pli disvastiĝu en Azio.

Mi volas helpi vin kun mia eta forto.

永瀬義勝

Nagase Yoshikatsu

VIVI EN HARMONIO KUN LA NATURO

Antaŭ semajno la Kroata Esperanto-Unuiĝo kun la Triesta Esperanto-Asocio (en Italio) organizis „*Semajnon de Internacia Amikeco*" kaj la organizantoj petis ke mi legu poemojn en kvar lingvoj, do japane, koree, hungare kaj esperante. Japane mi legis la poemon de Miyazawa Kenji titolitan „*Sen pluvo*" kaj montris kiel noblanime la orientazia japana popolo klopodas vivi: modeste, honeste, utile, helpante aliulojn, senkolere kaj trankvile ridante. Dum mia studenta vivo en la Nanzan Universitato en Nagoya mi persone povis sperti tiun allogan vivmanieron.

Poste mi havis eblecon instrui eŭropajn lingvojn en la Indramang Universitato en Koreio, kaj ĉeesti okfoje, aŭ dekfoje la internaciajn meditadajn renkontiĝojn en la Ŭonbulisma Religio. En la Indramang Universitato mi lernis, ke laŭ la Indramang koncepto interdependantaj rilatoj estas inter diversaj objektoj kaj fenomenoj de la Universo. Tio signifas, ke ĉiuj eventoj kaj fenomenoj havas kialojn, kaj oni devas agadi konforme al la ĝenerala leĝo de la Universo.

Tiu koncepto kongruas al la ŭonbulisma instruo, pri tio ni ĉiutage kutimas kanti mantron dum la meditadaj renkontiĝoj. La mantron verkis Ĝongsan, iama ĉefpastro de la ŭonbulisma religio. Nun mi citas la mantron en la orientazia interlingvo, ĉine kaj poste mi klarigos la tekston en la universala interlingvo, esperante en tri versioj. La unuan tradukon faris Choe Taesok, la du aliajn mi mem tradukis.

"天地靈氣我心定 Universa energio firmas en mia menso,
萬事如意我心通 ĉio vole interkomunikas kun mia menso.
天地與我同一體 Saman korpon formas kune kun mi la universo,
我與天地同心正 saman menson ĝustan havas mi kun la universo."

„Per sanktaj energioj mia menso klariĝas.
Kun universa leĝo mia menso unuiĝas.
En interdependataj rilatoj inter ĉiuj estaĵoj
miaj aferoj ĝuste plenumiĝas."

„Per sanktaj energioj mia koro trankviliĝas.
Ĉiuj laboroj same gravas, mia koro unuiĝas.
Ĉielo kaj tero egalas kun mi kun mia korpo.
Mi estas ĉielo kaj tero, kun tutsama trankvila koro."

La kerna signifo de la mantro estas: *„Oni havigu al sia menso la energion de la Universo kaj mense unuiĝu kun la tuta Universo. Tial ĉiuj aferoj plenumiĝas laŭ nia volo kaj fariĝas ĝustaj.”*

Mi pensas, ke tiu instruo tute kongruas kun la okcidenta vivkoncepto. En la okcidenta mondo multaj sciencistoj kaj registaraj oficistoj opinias, ke indus vivi en harmonio kun la medio, kaj oni zorge konstatas, ke la homaro ne emas sekvi tiun instruon. Dum la lastaj kelkdek jaroj la interhomaj rilatoj malboniĝis. Oni povas sperti ĉiutage, ke en la metrooj homoj ne kutimas konversacii, sed ili izolite rigardas sian poŝtelefonon dum la tuta vojaĝo. La homaro malpurigis la aeron, vundis la ozontavolon ĉirkaŭ la Terglobo, kaj konstruis atombombojn per kiuj la vivkondiĉoj povus tute detruiĝi. La mondo povus esti pli bona loko por ĉiuj estaĵoj, se la homaro vivus laŭ la poemo de Miyazawa Kenji kaj laŭ la Ĝongsana instruo ĝenerale. Nun legante la 300-an jubilean numeron de la Informilo de NEC mi deziras, ke ankaŭ en la venontaj 300 numeroj la legantoj povu konatiĝi kun la riĉa orientazia kultura tradicio per la universala interlingvo esperanto.

Márkus Gábor

☆ ☆ ☆

NUMATA Ehan kaj Japana Budhana Ligo Esperantista

NUMATA Ehan (沼田恵範, 1897-1994) estis entreprenisto kaj misiisto de Budhismo.

En 1916 li iris al Usono kiel misiisto de Shin-Budhismo (真宗). En 1936 li fondis Mitutoyo-kompanion de mikrometro. En 1962 li publikigis la anglan eldonon, “The Teaching of Buddha” por disvastigi Budhismon tra la mondo. En 1965 li fondis Budhisman Misian Asocion por oferdoni tiun sanktan libron al hoteloj, hospitaloj, lernejoj ktp en la mondo. La oferdonitaj libroj nombris 9,600,000 ekzemplerojn en 63 landoj.

En 1980 la 67a Kongreso de Japanaj Esperantistoj okazis en Yokohama. JBLE en sia fakkunsido decidis traduki tiun libron en Esperanton. En 1981

dank'al lia favora subteno JBLE povis eldoni ĝian esperantan version, "La Instruoj de Budho".

La libro estis tradukita ne nur en la anglan kaj japanan, sed ankaŭ en 46 lingvojn, al kiuj Esperanto aldoniĝis. Ĉiuj versioj de la libro tradukita en 46 lingvojn estas legeblaj en la retejo de Budhisma Misia Asocio:

<www.bdk-seiten.com/scripture-download.php>

En 1982 li entreprenis traduki, en la anglan, *Taisho*-Tripitakon (大正新脩大蔵経), kiu enhavas 11,970 sutrojn. La partoj de la sutroj jam tradukitaj estas legeblaj en la retejo de BDK America:

The Interpretation of the Buddha Land – BDK America

En 2021 laŭ la peto de Budhisma Misia Asocio YAMAGUTI Sin'iti, la prezidanto de JBLE detale revizias la esperantan version surbaze de la nova angla versio.

YAMAMOTO Osamu

第108回日本エスペラント大会

日時：2021年9月18日～20日
会場：アステールプラザ (広島市中区加古町4-17)
大会テーマ：ヒロシマの心を世界へ
La mondon ligas animoj de Hiroŝimo

主なプログラム(予定)

9月18日(土)
公開講演「ヒロシマを生き抜いて」（切明千枝子）、公開入門講座、開会式、分科会・各種番組、講演「英語の必要性とエスペラントの価値」（山川修一）、晩餐会

9月19日(日)
分科会・各種番組、野田淳子ミニコンサート、
夕食散歩（広島風お好み焼き「お好み村」行）

9月20日(月・祝)
分科会・各種番組、閉会式、大会遠足

斎藤秀一顕正活動

昨年９月２１日（祝）に「ウインクあいち」で開催された「第１０７回日本エスペラント大会」において「斎藤秀一に関する分科会」が設けられました。工藤美知尋様が「特高に奪われた斎藤秀一の青春　―　エスペラントと平和を愛した禅僧の悲劇」の演題で講演なさり、萩原（小林）洋子様が司会なさいました。

その予告と報告などが、以下のように２０２０年に記事化されました。これらはネット開催と実開催の併用があったからこその成果です。開催に御尽力いただいた皆様に、改めて御礼申し上げます。

９月１６日　東京新聞夕刊７面　斎藤秀一の紹介（吉原康和記者）
９月１８日　中日新聞夕刊８面　斎藤秀一の紹介（吉原記者）
９月２７日　荘内日報３面　分科会の報告（別府が寄稿）
９月３０日　東京新聞朝刊３面「この人」欄に別府が登場（吉原記者）
１０月３日　文化時報（部数三千、住職むけに週二回発行、購読寺院は全国に分布）６面（別府が寄稿）
１１月　曹洞宗報（部数一万五千、曹洞宗寺院が購読）９５頁
「斎藤秀一の顕彰活動」の題目で別府が寄稿
宗門の公的月刊誌に載った意義、大きいです。
１２月２５日 La Japana Budhano 404号の10-11頁

２０２１年に入ってからも斎藤に関する顕正活動は、続いています。

Ａ：部落問題研究所発行の「人権と部落問題」３月号4-5頁
「特高に囚われた曹洞宗僧侶」の題目で別府が寄稿
Ｂ：小林司著・かどやひでのり監修『斎藤秀一とその時代』
三元社において再校中です。Ａ５判800頁の予定です。
Ｃ：斎藤秀一に関する「朗読劇 ― 野に咲く花は、空を見ている」が、山形市と鶴岡市で計四回上演されます。

- ７月３１日（土）２時と７時の二回公演、山形市民会館（大ホール）
- １２月１１日（土）２時のみ、鶴岡市櫛引生涯学習センター
- １２月１２日（日）２時のみ、鶴岡市櫛引生涯学習センター

主催者は、山形平和劇場実行委員会です。委員会のメンバーの一人が山形在住の阿部満氏です。シナリオライターは、鶴岡在住の池田肇氏です。平和劇場は、山形市のサポートを得て、３５回目の公演を実現します。

別府良孝

ザメンホフ祭報告

本来12月に開催するはずだったザメンホフ祭は、コロナ禍のため二度にわたって延期となり、ようやく3月27日（土）に開催の運びとなった。場所は名古屋市中区錦の「リリーバンケット」、参加者は13人。司会は、新たにセンター副委員長となった今井田健二氏。

この集いの第一の目的は、昨年の日本エスペラント大会実行委員会を担った当地の仲間の慰労会。それゆえ、パーティー形式として、飲んで食べておしゃべりすることを趣旨とした。第二の目的は、大会記念品となった伊藤俊彦氏の『歴史・文学・エスペラント』の出版祝賀。名古屋エスペラントセンターとしても、出版にたずさわったのは、犬山で開催した第91回日本エスペラント大会で記念品となった"Gon-Vulpo kaj aliaj rakontoj"以来、16年ぶりのことだった。

山口より挨拶のあと、森田明氏による乾杯の発声を受けてシャンパンで乾杯。食事はブッフェ形式、飲み放題。この間、正面スクリーンには日本大会の様子の写真が連続投影され、それぞれに思い出に浸ることができた。

食事が落ち着いた頃、伊藤氏による挨拶と著書の紹介。その後全参加者がそれぞれの思い（日本大会について、現況について、読後感など）を披露した。

記念撮影は山田義氏が担当した。（途中で二人が早めに退出したため、11人しか写っていない）

山口眞一

活動日誌（1月から4月）

1／12（火）14時から16時　入門講座（教心寺）
1／15（金）17時半から19時半　中級講習会
1／21（木）19時から20時半　センター委員会
1／26（火）16時から18時　読書会（オンライン開催）
1／28（木）14時から16時　入門講座（教心寺）
2／10（水）14時から16時　入門講座（教心寺）
2／10（水）19時から20時半　センター委員会
2／19（金）17時半から19時半　中級講習会
2／23（火）16時から18時　読書会（オンライン開催）
2／25（木）14時から16時　入門講座（教心寺）
3／5（金）17時半から19時半　中級講習会
3／10（水）14時から16時　入門講座（教心寺）
3／10（水）19時から20時半　センター委員会
3／19（金）17時半から19時半　中級講習会
3／25（木）14時から16時　入門講座（教心寺）
3／25（木）16時から18時　読書会（オンライン開催）
3／12（火）14時から16時　入門講座（教心寺）
3／27（土）13時から16時　維持員総会
3／27（土）16時半から19時半　ザメンホフ祭・出版記念パーティ（p.27参照）
4／8（木）14時から16時　入門講座（教心寺）
4／9（金）17時半から19時半　中級講習会
4／19（月）19時から20時　センター委員会（オンライン開催）
4／20（火）16時から18時　読書会（オンライン開催）
4／22（木）14時から16時　入門講座（教心寺）
4／23（金）17時半から19時半　中級講習会

▶編集後記

○機関誌のバックナンバーを読んでいると、ついつい時を忘れて読み耽ってしまうことがあります。それが自分が直接に関与した時代であればむろんのこと、そうでなく自分が知らない時代であっても、その時代社会の気風（etoso）が感じられます。思いがけない発見もあります。「センター通信」300号の息吹は、全号電子化によって、皆様にも感じていただけるでしょう。もうしばらくお待ち下さい。（山口）